

『姉貴、ジュース買ってこい!』

姉に支配されてきた男がついに反旗を翻すも、
姉の容赦のない金的攻撃に沈み、余計立場が下がる話



玉子王子 著

一章 逆らう弟にはちょきちょきかなー

「剛、ジュース買って来て！」

ボブカットというのか、ふわりとした短髪の少女。

原条アヤホ。

左右に同じ年の少女たち、前には少年。

とある学校帰りの道端。

目を伏せる少年は彼女より背も高いし体重もある。

アヤホの周りの少女らは少し心配げな顔をするが、アヤホは平気なものだった。

少年が、うめくように口を開く。

「姉ちゃん、金は？」

「金え？ 金ならあんたのそこにぶら下がってんでしょ？ お姉さまと違ってね」



弟の股間を指さし、ニヤリと笑う。白だか銀だかの美しい色の髪で美少女とっていい整った顔立ち、しかも巨乳。

その突然の下ネタにも、弟は動じない。

多少赤面する程度。

いつもこんな感じだからだ。

さすがに友人の前であることは多少驚く。

同時に、うんざりもしていた。

——このクソ馬鹿姉貴、新しい友達出来たらすぐこれだ。弟にデカイ顔してるのが、自慢になるとかってんのかこいつ。自慢になるかはわからねえけど、「姉貴に顎でこき使われてる弟」はマイナスなんだよ。マジで迷惑。女どもはなんでもすぐ情報共有しやがるし……おかげで彼女なんてできたこともない。

「ほら、さっさと行ってきなって」

「わかったよ……」

二個上の姉。ずっと子分扱いだっただ。なのに同じ高校に入るというのもアレだが、友人がみなそこのなので、剛も他を選ぶことはできなかった。

まあ、その程度の理由で同じ学校に通える程度の「うんざり」であり、離れて見れば仲のいい姉弟でしかない。

走っていく弟の背中を見つつ、友人らがアヤホに興奮した様子を見せる。

特に、茶髪ツインテールの永穂が多少息も荒い程に興奮していた。

「すごいじゃない、ああいう関係、憧れるよ」

「そ、そう？」

——憧れるって、大げさねえ。でもまあ、受けてくれて嬉しいわ。

「うふふ、それで……どういう秘訣があるの？ 弟君との支配関係には」

「え？ 秘訣なんてないよ」

「またまた……何もしてないわけじゃないじゃん」

「あ……ちょっと、ヤダなあ」

顔を赤らめるアヤホ。

「あんなクソ馬鹿と、何かしてると思ってるの？ エロ的な？」

「ちょっと、どういう発想よ。そうじゃなくて、暴力的なあれよ」

「暴力って……」

絶句するアヤホに、目を見張る永穂。

「え……逆らったら、その、ここをグチャっと……やるからこそのあの態度じゃ？」

スカートの前を押さえ、少し腰を引いて見せる永穂。

残りの二人の少女に目を向ける永穂。

「男を支配するにはキ○タマ蹴りしかないよ、それが常識っしょ？ ねえ、アヤホがおかしいよね？」

「ちょ、キン……急所直接口にすんなって」

「っていうか永穂一、弟のそこグチャっといくとか、どんな姉よ。ねえアヤホ」

「そうだよ。っていうかずっと昔間違っただてちやってねえ、結構大変で。それ以来そんなところ…
…まあ別に大変だったって、潰れても大丈夫な時代だけだよ」

ナノテクノロジーが発達し、どんな怪我でも数秒で治す薬が安く売られている時代である。

否定されたのに、目を輝かせる永穂。

「えーっと、大変っていうのは、キンキンが、片方いっちゃったとか？ あは、片金だ、カタキン」

「片金って！ 泣いたりして大変だったってことだっつーの、なんでそんな私を玉潰し女にしたがるのよ」

「ぎゃははは、玉潰しって……そんなことねえ、するわけないって」

「だよね、「潰すぞ」とか言うことはあっても」

「いくら治るからってね」

二人がうなづき合う。

首を捻る永穂。

「うーん、それじゃなんでああいう関係に？」

「そりゃ昔からだし。二個も下だもん」

「そりゃ昔はアヤホのほう体が大きかったんだろうけど……今は弟君のほうで圧倒的じゃない？
片手でアヤホの腕四本分ぐらいの力ありそう」

「んー、それは」

——それは薄々……考えないようにしてきたけど、そうだよねえ。っていうかあいつが中学ぐらいの時点でもう力じゃかなわなそうだけど……でも男女じゃ殴り合いするわけでもないし。そもそも小さい時からの力関係だっただけ殴り合いで決まったわけじゃないしね……まあ昔は殴り合いでもお姉ちゃんが勝っちゃうぞ、っていう抑止力はあったっていえばあったと思うけど。大体……あは、一回とはいえ、男の急所やっちゃってるから、その恐怖もあったのかもだし。

「確かに、今は力じゃかなわないわねえ。でも女相手に「力で勝負だ！」っていうわけないし、このままで行けるんじゃないかな？」

「そりゃまあそうかもね……でも常識ないクソ野郎もいるでしょ？」

「剛はそんなんじゃないって」

「まあもし、弟君が下克上狙って、お姉さまに暴力振るうようなら……あはは」

パン、と自分の股間を叩く永穂。

ボソリとつぶやくように言う。

「妹にしちゃえよ」



「やだっ！ **男のお急所**粉碎だなんて！」

「ぎゃははは！ いいわね、お姉ちゃんに暴力振るうような弟は、キンキン潰しちやえ潰しちやえ！」

「もう、人の弟だと思って……でも、妹欲しかったのは事実だけどね」

よそ見しつつ、自分の股間に手を持っていくアヤホ。

チョキをして、指を閉じ開きする。

爆笑する少女たち。

「切断、切断来たわ！」

「チョキチョキ！ 男の最大の恐怖、**おニンニンチョキチョキ**出た！」

「よっ、**妹製造機**！」

最悪、実際そうしても薬で一瞬で治る。

何より自分たちが責められる側になるうがなにしようが、「付いていない」のだから切られたり潰されることは絶対に完璧にあり得ないという圧倒的優位だからこそ、心から笑ってられる。

これが男だと、「自分の」を切られたらという恐怖が、この場では切る立場だろうがありえるため若干の恐怖も遠慮も発生する。

しかし女だと、それは全くなかった。

寂しい道で、周りに人氣が無いので外聞を気にせず笑ってられる。

が、彼女らは忘れていた。

この場に男が来る、というか戻ってくる予定があることを。

曲がり角で、壁に背を向けて剛は震えていた。

——い、いかれてやがる……ち、チ○コを……いくら治るからって、いくらでも治るからって……本気じゃないにしても、そんな、チョキチョキって……マジかよ。よく口に出せるな。女って、やっぱり付いてないから……

両手にジュースを抱え、動けない。

片手でも空いていれば、姉に見られれば妹扱いされそうなほど縮み上がった股間を揉んで少しはましにしようとするだろうが、それもかなわない。

ただ立っているしかない。

二章 君のご主人様は私だけ

うさぎ県立、矢立学園。

放課後、屋上。

女子に呼び出され、剛は嫌な予感がしていた。

姉に抑え込まれてきた彼にとって、女子というのはなんとなく怖い存在だった。

——昨日**チョコチョコキ話**聞かされたから、なおさら怖いんだよ。いきなり玉蹴ってくることもないだろうけど……

そんな意味不明に近い不安を抱えつつ、話を聞いて驚く。耳を疑う。

今まで聞いたことがない言葉を聞かされた。

それは愛の告白だった。

「え、つ、付き合うって……俺と？」

「そう、原条くんと」

「いいのか？ 永穂」

永穂ヤスミ、剛のクラスメイト。

剛はその名に特に聞き覚えはないが、姉の友人の苗字と同じだ。

同じというか、妹。

姉に支配されているMっ気ありそうな男子がいたと姉に聞き、それがクラスメイトだと知った永穂の心は踊った。

友人アヤホが弟を**金的支配している**と勘違いして目を輝かせるドS姉と同じく、彼女もドS女子である。

ここ、うさぎ県はそういう女性の割合が世界一多いとされている祝福された土地、あるいは呪われた土地である。

顔を赤らめ、目を伏せるヤスミ。

伏せるふりをしつつ、見ていた。

剛の股間を。

——うわー、ここ……お姉さんに支配されて**悦んでる**ドMくんなんだから、付き合ったらエッチのたびに蹴り潰していいんだよね？ やだ、どうしよう……考えただけで濡れちゃう……

いつの間に「支配されて悦んでいるドM」設定になったのか。Mといっても金的好きだけではないだろうし、いくら簡単に治るといっても性交ごとに去勢は大体のM男子にとってもやり過ぎだろう。

まあ治るのだから、蹴った結果潰れてしまうぐらいならまだしもだ。

初めから「じゃ、今日も去勢するね！」では、金的マゾだけ集めても、大抵は逃げ出すだろう。

しかし初めて付き合いたいと思った男を前にした純真な少女は、相手を際限なく理想化してしまうのだった。

——キ〇タマ潰したい？ もちろんだよ、これは潰されるためについてるんだから。とか、イケメ

ン台詞言われたらどうしよう……おかしくなっちゃうよ……

なっちゃうとかすでにそうだと思う。

「えーっと、返事だよな？ もちろんOKだよ」

「やった、ありがとう！ ……でも、付き合うからには、浮気は無しだよ」

「もちろんだよ。浮気なんてしないよ」

しないというよりできるわけがない根っからの童貞男子だ。姉アヤホは昔格闘技ブームの時に総合格闘技を始め、剛も当然のように引き込んだ。本人はさっさと飽きてやめたが、剛は続け、今も部活でやっている。

部活で総合格闘技があるというのは他所から見れば珍しいが、うさぎ県は格闘技が盛んな県でもあるので県内においては普通だ。

ともかく剛はスポーツ男子で、彼女ぐらいいてもおかしくはないが、姉のせいで女への恐怖心がありなかなか踏み出せず、今までいなかった。

これからも、まだまだ自分から声を掛けられる感じにはなりそうにない。

その辺は、なんとなくヤスミも察しているが、あえて突っ込まない。

「よその子もだけど、お姉さんもだよ」

「え、姉貴？ 姉貴？ 姉貴って……俺の姉貴？ あのク」

周りをちらちらとみる。

姉の姿がないのを確認してから、多少引きつりながらセリフを再開する。

「あのクソがどうしたって？」

「お姉さんの言いなりなんだって？」

「い、言いなりじゃないって」

「私のお姉ちゃん、原条くんのお姉さんのクラスメイトだから聞いているんだ」

「そ、そうなんだ」

——クソがああああああ！ ついにこういう日が来やがった！ やっぱり「姉の言いなりの弟」はポイント低いよな、そりゃ！ 畜生どうしてやろうか……で、でも何ともしようがない。どうすりゃいいのかわからない。殴り合いなら勝てるに決まってるけど、姉ちゃん殴るなんて……試合もあの時以来やってないし……

膝が閉まる。

あの時。

ずっと昔、まだお互い習いたてだった頃。

家でも練習しようというアヤホだったが、大してうまくもなかった。

それがむしろ剛に災いした、下に見ている弟に押されてメンツを失いかけた幼女アヤホは一発逆転で顎を蹴り上げようとする。が、足が上がりず、股間に直撃した——その程度しか上がらないのに顎を狙えると思うのだから運動音痴というしかない。まあ股間に当たらなければ腹ぐらいまでは上がっただろうが、それでも顎には大分遠いだろう。

顎に当たっても危ないことは危ないが、思いきり振り上げた爪先が股間にである、文字通りたまらない、転がり、泣きわめいた。

——鬼気迫る様子だったんだな、蹴った姉貴も泣きそうになり、必死に介抱してくれて……してくれて……どうなったんだ？

何か、頭にもやがかかる。

余りよく覚えていない。相当昔の話でもある。

覚えているのは、そのショックでアヤホは総合にあまり興味がなくなってやめたことだ。怖くなったとも考えられる。

それが普通感覚だろう。

——そうだよ、それが普通。おふくろなんて後で話したら「妹になるところだったね」とか言って笑いやすかったからな。潰れても治るからってお前、息子のキ〇タマの危機でそれかよ。

うさぎ県女子の鏡といえるだろう。

「お姉さんに支配されて悦んでるとかおかしいよ」

「いつ悦んだんだよ!？」

「あ、そうだったね。悦んでない……という設定」

「設定じゃねー!」

「でも、本当に嫌なら……力で勝った時点で、お姉さん殴ってでもねえ……」

「いや、そんな、姉貴殴るなんて……」

「うん、わかるよ。そういう優しい人だから、好きになったんだ」

——ほんとはドM彼氏が欲しかっただけだけど。優しいのも好きだけど、それだけで男として好きになるかは別だしね。と、それは言わないでおこう。

「でもそろそろ、自立する時だよ」

「ん……まあ」

「彼女ができたわけだから」

「そうだね。彼女できたんだから……彼女できたんだから。でへ……」

チラ、と胸のあたりを見る。ろくに知りもしないクラスメイトにいきなり告白され、受け入れるからには体目当て以外にはないのだ。

ため息が出そうになるヤスミ。

——やれやれ、男の子ってしかたないわね。オッパイ見て、しかも気づかれるとか。やっぱ体目当てなんだ？ これはみっちり……うひひ、金ちゃん蹴りで調教しかないわね。ああ、楽しみ。私専用キ〇タマがついに手に入ったんだから。

これはこれで体目当てでしかない考えといえるだろう。

——でも、私専用にするには、お姉さんとの倒錯した関係を終わらせないと。そのためには……どうしようかな。やっぱり、何とか力で勝つてると示して、立場を逆転させるのが一番早いよね。喧嘩……男女じゃもろ喧嘩は無理だから、格闘技の試合っぽく偽装できればいい感じだけど……

「お姉さんは格闘技とかやってないの？」

「昔総合やってたけど」

幅のある発言だった。何年もしていた場合でも同じ表現だろう。

しかし実際には幼女時代一か月程度だ。

それで「総合やってた」では誇大広告もいいところだが、まあ嘘ではない。

契約書に、読めないような小さい文字で細かいことを書きまくるような、巧みな手口といえる。

もちろん剛に騙す気はない、情報を正確に伝えることに関心がないだけだ。

「総合か……」

——総合は金的無しとはいえ……そりゃ男の子と喧嘩するなら狙うよね。絶対狙う。というか、男の子と喧嘩する理由の第一位は「キンキン蹴りたいから」でしょ。蹴らないんじゃ喧嘩する意味ないし。絶対タマタマ潰しに来る。うわ、私にやらせてほしい……って、そういう事じゃないでしょ。こ

のM野郎を私専用にするために、お姉さんの支配をから独立させるってことなんだから……私専用
にすれば、このタマタマも私専用キ○タマとなり、いつでも潰し放題なんだから。



初彼女がこんなことを考えているなどと思もしない剛は、暗澹たる思いだった。

——ヤベえよ、姉貴の支配から逃れないと、付き合えないっていうのか？ いや、おかしいだろ、この子から告ってきたのに。注文つけるの？ そりゃ付き合いたいから聞くけど。というか、やりた
いから聞くけど。っていうか、もう今日の帰り、どっかで……ヤベ、チ○ポ立ってくる、ばれないか
な……

モゾ、と股間を動かす剛。

動きに気づくヤスミ。

恥ずかし気に伏し目がちなふりをして股間を凝視する擬態に長けている彼女は、当然妙な動きに
チェックの目を向ける。

——んー、なんかちょっと変な動きしたから、チンチ○立っちゃったのかと思ったけど、別にそう
でもないみたいね。全然膨らんでないし。あは、立ってこれだったら超短小じゃん。おかしいよ、変
態野郎は無駄にデカいはずだもん。

別に「絶対そう」という話ではないし、そもそも剛はMではないのでその法則とは無関係だ。

——っていうか、小さけりゃ短小責めもできるからいいんだけどなー。

期待通り剛は短小である。立って一桁という悲劇。

が、それはこの場ではどうでもいい話だった。

「総合って、どのぐらい強いのか？」

「最強の格闘技はまだ決まってない」

「そうじゃなくて、お姉さんの腕前」

「一か月ぐらいしか通ってないから、腕もくそもないよ」

「え？ あは、なーんだ。それじゃ、久しぶりに試合して、とか言ってさ、力見せつけりゃいいじゃん。問題は乗ってきてくれるかって所だけ」

「見せつけるって……俺のほうが強いのは当たり前だろ。何か変わるのか？」

「変わるよ、明らかに強いって実地で教えて上げてさ「これからはこれまで通りじゃないよ」って示せば」

「それどうやって示すんだ？」

「まあ、とにかく試合してさ」

「そんなんでいいのかな？」

「お姉さんから離れて、私といいことしようよ」

「するする！」

いいこと＝玉潰し去勢とは思ってもよらない剛。

まあ、本番もやる気なので完全に間違ってもいない。

体験版終わり

この後剛は姉に金的を蹴られ、悶絶したところを母と姉に脱がされ、極小の一物を見られます

母親でさえフォロー不可能の極小なので話題にしないようにと姉を注意するところが目が覚めたために聞かされるという短小言葉責め

そのあと、彼女に騎乗位で一物を折られかけ、手で折られたり、姉たちに金的を潰されたり

姉や彼女らに寄ってたかって玉潰しの上に

一物をハサミで何度も切られるなど散々な目にあわされます

それがドSな彼女らにとってはお楽しみ半分愛情半分という、砂糖味の地獄

続きは製品版でお楽しみください